

# 太平洋戦争期のマレー民族主義運動 (I)

—— 左翼民族運動指導者の座標から ——

なが い しん いら  
長 井 信 一

はじめに

- I 太平洋戦争前におけるマレー左翼民族主義の成長
- II 太平洋戦争開戦前後における「マレー青年連盟」と日本との接触

(以上、本号)

- III 軍政下の民族対策：1942年4月～1943年3月
- IV 軍政以下の民族対策：1943年4月～1945年3月
- V 「クリス運動」  
結びに代えて

はじめに

第2次大戦前の「複合社会」マラヤでは、植民地支配体制に対置、代置されるべきナショナルな政治共同体の理念は育ちにくかった。マレー系社会では、イギリスの統治下で伝統的支配層が温存され、大衆は各回教土侯州の伝統的社会に封じ込められたため<sup>(注1)</sup>、反植民地体制的な政治意識と政治運動がマレー系左翼民族主義団体の形をとって現われたのは、ようやく1930年代末のことであった<sup>(注2)</sup>。

もともと、マレー系社会の自己認識<sup>アイデンティティ</sup>にかかわる運動という意味でのナショナリズムの前期的段階は、今世紀初頭から回教改革主義の鼓吹という、一義的には宗教的な運動から始まり、その延長としてマレー土着伝統的社会の改革という脱宗教的

な社会教育的運動の発展という方向をたどり、1920年代から植民地支配体制の部分的批判という、主に伝統的支配層出身の西歐的教育をうけたマレー人官僚、専門職業者層の体制内的、漸進主義的な政治運動が育ちはじめ、その組織が正式に州単位の「マレー人協会」(Malay Association)として成立したのは1938年のことであった<sup>(注3)</sup>。

こうして、20世紀初頭から1930年代末までの間に、マレー社会には、まず回教改革派グループ。ついで、いわば脱宗教的グループとして英語教育を受けた官僚・専門職業者グループとマレー語教育を受けた左翼グループの二つ、都合三つの主要な流れが、マレー・ナショナリズムの成長過程に出現した。マレー左翼グループは、全マラヤのひろがりにおけるマレー人の統一という意味でのナショナルな意識を備えた最初のマレー人政治団体であった。こうした第2次大戦前のマラヤにおけるマレー・ナショナリズムの起源については、ラーディン・スナルノの鉤入れの労作を引き継いでより詳細に解明したウィリアム・ロフの著作 *The Origins of Malay Nationalism* があるが、大太平洋戦争期まで足を踏み込んでいない。そして、太平洋戦争中にマラヤのマレー人社会の民族主義運

動において、開戦前後における日本側との接触以降、もっとも積極的に行動したのは、マレー左翼グループである「マレー青年連盟」(Kesatuan Melayu Muda) (注4)であったと思われる。そこで、以下において、主に太平洋戦争直前の1938年に「マレー青年連盟」が結成されてから太平洋戦争終了までの期間について、マレー左翼民族主義運動リーダーを座標にしながら、マレー民族主義運動を日本軍政との対応の文脈で分析する。

(注1) 長井信一「マラヤの政治指導者——マレー系を中心とする一つの仮設的試み」(『アジア経済』第6巻第6号 1965年) 2ページ。

(注2) 第2次大戦前のマラヤ・シンガポールのマレー人民族主義運動については次の主要労作がある。(刊行年代順) Silcock, T. H. and Ungku Abdul Aziz, "Malay Nationalism," in W. L. Holland (ed.), *Asian Nationalism and the West*, New York, 1953, pp. 269—346; Radin Soenarno, "Malay Nationalism, 1900—1945," *Journal of Southeast Asian History*, 1 March, 1960, pp. 1—28; Usha Mahajani, *The Role of Indian Minorities in Burma and Malaya*, Bombay, 1960; Roff, William, *The Origins of Malay Nationalism*, New Haven, Yale University Press, 1967.

太平洋戦争期の日本のマラヤ軍政政策プロパガーの労作としては、

Itagaki, Yoichi, "The Japanese Policy for Malaya under the Occupation," in K. G. Tregonning (ed.), *Papers on Malayan History*, Singapore, 1962, pp. 256—267; Akashi, Yoji, "Japanese Military Administration in Malaya," *Asian Studies*, Vol. VII, No. 1 (April 1969).

(注3) Roff, *op. cit.*, pp. 235—247.

(注4) Radin Soevarno, *op. cit.*; Roff, *op. cit.*; Ibrahim bin Haji Yaacob, *Sejarah dan Perdjjuangan di Malaya* (『マラヤの歴史と闘争』), Jogjakarta, 1951; Ibrahim bin Haji Yaacob, *Sekitar Malaya Merdeka* (=on Free Malaya), Bahagian Penerangan, Kesatnan Malaya Merdeka, n. d.

## I 太平洋戦争前におけるマレー左翼民族主義の成長

「マレー青年連盟」は、今世紀10年代後半に植民地政府が「農村重視」の方式でマレー語系小学校教育制度を改革し、その関連でマレー語小学教員養成のため、1922年にペラ州南端のタンジョン・マリムに開設したスルタン・イドリス師範学校の誕生にさかのぼる(注1)。この師範学校の学生は、競争試験により、マレー農村のマレー語系学校から選抜されたもので、その大半は農民、漁民の子弟であった。その点でこの師範学校は、伝統的マレー支配層の子弟を英語で教育する「マレー・コレジ」(注2)とは対照的だった。両者に共通する特徴は、マレー半島の異なった地方出身の学生が、学校生活を通じて、共通の、いわば汎マレー的な意識を植えつけられる機会をもったことである(注3)。

この1920年代のマレー政治社会史的意義は、それまでの回教改革主義者の、一義的には宗教的な運動から、中東の大学でインドネシアの留学生と組んで反植民的体制的な思想活動を展開し(注4)、次の1930年代の政治的なナショナリズム運動の展開へ結ぶ過渡的段階だったことである。

当時、インドネシアでは、オランダ植民地体制顛覆をはかる組織的な暴力行動の形で政治的不満が爆発しようとしていたが(注5)、スルタン・イドリス師範学校の学生は、このインドネシアから大きな影響を受けた。師範学校の教科書自体が、第1次大戦後インドネシア語文献の出版活動を盛んに行なった蘭領東インドのバライ・プスタカが出したさまざまな分野の教科書を輸入したものを使用した(注6)。バライ・プスタカを中心に盛んになったインドネシア国語改良運動と、それと表裏一

体して進展したインドネシアのインテリ民族主義者の戦闘的活動は、マラヤのマレー語教師一般特にスルタン・イドリス師範学校関係者に強く影響した(註7)。

イブラヒム・ビン・ハジ・ヤーコブは、1929年から3年間の在学中に、上記のインドネシアの民族主義運動に啓発されて、マラヤでも同様の運動を展開しようとする約35名の学生グループの指導者となった。このグループは、蘭領東インドの「ヨング・ジャワ」や「ヨング・スマトラ」といった青年運動にならって、Belia Malaya(マラヤ青年を意味するマレー語)と称した(註8)。イブラヒムは、卒業後パハン州の小学教員生活を経て1930年代半ばにクアラ・ルンプールの警察学校のマレー語教師となり、マレー語文芸活動に従事し、当時流行したマレー人の教育的、経済的向上を論じる「ペン・フレンドの会」クアラ・ルンプール支部の会合に顔を出していたが、ここでの議論がハッキリした政治的、反植民地的な内容に乏しいのにイラダチをおぼえた。イブラヒムの友人の中には同様の不満を感じている急進マレー民族主義者が少なからずあった。

しかし、これらマレー人急進的ナショナリストが当時直面した真の問題は、ウィリアム・ロフの表現を借りるならば、彼らの運動は「近代的な組織作りの技術についての知識のマッチもカリスマの点火ガラスもなしに、湿った木で火を起そうという試みも同然だった」(註9)という点である。すなわち、当時のマラヤのマレー人社会は、大体依然として伝統的な社会関係が支配的な農民社会であり、政治文化の面から言えば、それぞれのマレー土侯国とそのスルタンに対する個別主義的、伝統的な忠誠心と、既存の権威に黙って服従する態度が根深く、体質化していた。1930年代半ばまで

に、マレー語ジャーナリズム、自己改良団体等の抬頭といった動きはあったが(註10)、マレー人大衆は、ひたすらに伝統的支配層の指導を受身に待つばかりであった。当時のマレー人一般大衆の理解からすれば、いわゆる「政治」とは、Siasat すなわち「政府の政策決定」を意味した。マレー人被治者大衆の実感として、こうした意味での政治にかかわり合いを持つことは、支配者から処罰されるか、ひどいおとがめのあるおそれがあった(註11)。そういう意味で「分際をわきまえる」という意識がマレー人被治者大衆(急進的青年を含めて)を支配していたのが当時の現実だったのである。こうした政治文化の雰囲気の中にあつたゆえに、1938年にマレー半島の土侯国に、西洋風の教育を受けた保守的な伝統的エリート出身の指導者を戴く、最初の公然たる政治団体である「マレー人協会」(Malay Association)(註12)が結成されるのを待ってはじめて、イブラヒムら急進青年グループは、年来の計画を具体化して左翼政党を結成することに踏み切る自信をもったわけである(註13)。

「マレー青年連盟」指導層は、イブラヒムのような師範学校出身の教員、セルダン農林学校、クアラ・ルンプールの工業学校関係者その他ジャーナリストなどで構成されていた(註14)。「マレー青年連盟」の目的は、イブラヒム自身によれば、外国の植民地支配から脱して独立マラヤを建設し、しかる後に旧英領マラヤと蘭領東インドを政治的に統合して東南アジアの大国としての《インドネシア・ラヤ》ないし《マレーシア・ラヤ》をつくり上げることであった(註15)。しかし、当時のマレー社会の政治文化の雰囲気の中では、「マレー青年連盟」の政治的信条は大多数のマレー人にとって急進的に過ぎ、今世紀20年代までのマレー人社会における回教社会《革新派》Kaum Mudaのイ

メージに結びつくものであった<sup>(注16)</sup>。「マレー青年連盟」自身も秘密裡に活動する態度をすてようとせず、クアラ・ルンプール以外に組織を拡大する能力も資金もなかったので、党員数もせいぜい200~300にとどまったと推定される<sup>(注17)</sup>。

(注1) Roff, *op. cit.*, pp. 126—177.

*Memorandum on The Sultan Idris Training College and Malay Vernacular Education*, Enclosure No. 1 to Federated Malay States Despatch No. 344 of 30 May, 1931, CO 273—574/82094.

(注2) Roff, *op. cit.*, pp. 100—112.

(注3) *Ibid.*, p. 143.

(注4) *Ibid.*, pp. 87—90.

(注5) 1920年代のインドネシア民族主義運動については、次の主要著作がある。Bevda, Harry, *The Crescent and the Rising Sun*, The Hague, W. van Hoeve Publishers Ltd., 1958; Van Niel, Robert, *The Emergence of The Modern Indonesian Elite.*, The Hague, W. van Hoeve Publishers Ltd., 1970; McVey, Ruth, *The Rise of Indonesian Communism*, Ithaca, Cornell Univ. Press, 1965.

(注6) Roff, *op. cit.*, pp. 145, 155.

(注7) *Ibid.*, pp. 222—225.

筆者のイブラヒム・ビン・ハジ・ヤーコブ(またの名を Drs. Iskandar Kamel)との面接、1973年2月、ジャカルタ。

(注8) Roff, *op. cit.*, p. 172.

(注9) *Ibid.*, pp. 229—230.

(注10) *Ibid.*, pp. 178—210, 212—221.

(注11) *Ibid.*, pp. 217—218.

(注12) *Ibid.*, pp. 235—247.

(注13) *Ibid.*, p. 230.

(注14) *Ibid.*, p. 231.

(注15) *Ibid.*, pp. 232—233.

(注16) *Ibid.*, pp. 56—90.

(注17) *Ibid.*, p. 234.

## II 太平洋戦争開戦前後における「マレー青年連盟」と日本との接触

「マレー青年連盟」を1938年に結成してその会長

となったイブラヒムは、1940年から41年にかけてマラヤ各地を回り、マレー語学校教師・学生の団結を図った。この動きは、1938年半ば以降「マレー人協会」が各州に次々に結成されていくのに対抗して、マレー語教育の背景をもつマレー急進派の強化・拡大を意図したものと解釈できる。この結果、《ペラ州マレー青年》(Belia Melayu Perak) 《ポンドク回教学生団体》(ベナン、ケダ)、《ケラantan州マレー青年》(Belia Melayu Kelantan) が発足した。イブラヒムはまた、パハン州で華僑、インド系住民の政治活動家と接触し、さらにムサ・アフマッド (Musa Ahmad)、アブドゥラ・シディ (Abdullah Sidi)、ラシド・ムヒディーン (Rashid Muhideen)、シヤムシア・パケ (Syamsia Pakeh)、ラソ (Lasso) などのマレー人共産党員とも知り合った<sup>(注1)</sup>。

このマレー半島各地の旅行の間に、イブラヒムは、1940年末、東海岸トレンガヌ州の鉄鉱山の町ドゥングンのレスト・ハウス(政府経営のホテル)で同地の日系鉱山会社の日本人副支配人から、シンガポール在住の石川に会うよう示唆された。翌41年春、イブラヒムは、シンガポールで、同市ハイ・ストリートでゴム仲買の事業を営む石川と、さらに石川を通じて同盟通信社のシンガポール特派員飼手馨四<sup>(注2)</sup>(イブラヒムには Te Kai Te という名で知られていた)<sup>(注3)</sup>と接触し、この線を通じてシンガポールの日本総領事館筋から反英宣伝の目的でマレー語紙を経営するため2万5000海峡ドルの資金の提供を受け、まず手渡された2万ドルで同年8月に『ワルタ・マラヤ』紙をアラブ人所有者から譲り受けた<sup>(注4)</sup>。日本側の意図は、開戦に備え、マレー半島の軍事情報を得るルートを開拓することで、総領事館書記生に姿を変えていた鹿兒島陸軍少佐とシンガポールの同仁病院の河野医師

(やはり参謀本部から派遣されていたといわれる)が伸ばしていた触手にイブラヒムがタッチしたわけである。

イブラヒムは、1941年半ばまでに、インド人や華僑の間に日本と協力しようという秘密裡の企てがあるという噂を聞いていた(註5)。事実、1941年初め、駐タイ日本大使館付武官の田村大佐は、バンコックで「インド独立連盟」のプリタム・シン、アマル・シンと接触していた。同年7月末、東京の大本営陸軍部第八課の門松中佐がバンコックに赴き、田村大佐と会談した際、田村大佐から(1)シンガポールの華僑の間に反英運動を起こさせる工作を試みていること、(2)「インド独立連盟」を通じる工作が進行していること、(3)マラヤ在住の日系人で当時マレー半島東海岸で3000人の匪賊の頭目となり、「ハリマオ」(マレー語で虎の意)として知られている谷豊という青年と接触し、神本利男という工作員を通じて、有事の際にはマレー人に対する宣伝、英軍に対する謀略に使おうという計画があることを知らされた(註6)。他方、すでに述べたように、1941年春に日本側は、シンガポールで「マレー青年連盟」に接近し、マレー民族主義者と関係を樹立し、マレー人の独立に支持を与えたいという意向を明らかにした。この際、日本側は、すでにマラヤのマレー人以外の民族グループと関係があり、日本がマレー人に望むのは、日本軍がマラヤに上陸した暁にマレー人が日本人と戦わないことだけであり、マレー人の独立も将来与えられるはずだ、と声明した(註7)。

門松中佐は、上記の田村大佐の情報を東京の大本営へ持ち帰り、その結果、9月18日に第八課の藤原岩市少佐らが参謀総長杉山大将から「泰国駐在武官田村大佐のもとにおいて、主としてマレー方面の工作特に印度独立連盟およびマレー人・支

那人らの反英団体との連絡ならびにその運動の支援に関し田村大佐を補佐す」という要旨の訓令を受けた。この際、杉山大将は、藤原少佐の任務は、「差当り日英戦争が勃発するようになった場合、日本軍の作戦を容易にし、かつ日本軍とマレー住民との親善協力を促進する準備に当るのであるが、大東亜共栄圏の建設という見地に立って、印度全局を注視し、将来の日印関係を考慮に入れて仕事」するよう付言した(註8)。

藤原少佐は、1941年10月1日にバンコックに到着し、同10月10日頃「インド独立連盟」書記長プリタム・シンと田村大佐の宿舎でひそかに初会見して、いよいよ対インド人工作を開始した(註9)。藤原少佐は、この「インド独立連盟」工作のほかに上述の華僑工作やハリマオ工作进行を指導していたが、11月中旬頃、シンガポール日本総領事館からの連絡で「マレー青年連盟」に関する情報を入手した。この情報から藤原少佐は、「マレー青年連盟」が「シンガポールに根拠をもって、表面『ワルタ・マラヤ』という新聞を経営しつつ、マレー各地に細胞組織をもち、反英活動を志している比較的有識者、無産マレー青年の秘密結社」であり、「その運動の主義は、英国のきはんから脱却すること、英国人に利用されている有産階級のマレー人を排撃することにある」(註10)ことを理解した。前に触れた「ハリマオ」は感情的な反英感情のほかに民族的な主義主張がなく、その勢力圏もクワンタン州(バハン州の間違いか——筆者)に限られているため、マレー人に対する民族工作に手がかりがなかった折柄、田村大佐も藤原少佐もこの通報を大いに喜び、非常な期待をもってこの団体との協力を策した。

藤原少佐は、11月下旬にシンガポールからバンコックに引き揚げてきた鶴見総領事から上記の情

報について詳細な説明を受けた。藤原少佐は「マレー青年連盟」の使者と南泰に派遣されている藤原少佐の部下がマラヤ国境で会見し協力の方法を協定させたいと焦慮した<sup>(注11)</sup>。藤原少佐は、「マレー青年連盟」に期待する協力について要旨をシンガポール総領事館に打電し、シンガポールから陸路11月28日にバンコックへ引き揚げてくる予定の同盟通信社の飼手特派員が重要な連絡をもたらすはずであったが国境封鎖のため足止めをくってしまった<sup>(注12)</sup>。飼手特派員は、さらに12月1日シンガポール出帆予定の船を利用しようとしたが、この船も出航を押えられてしまった。こうして、12月初めになっても「マレー青年連盟」からの密使はまだようとして消息がなかった。

この間、12月1日頃、マラヤのケダ州の州都アロール・スターに20年も居住して雑貨商を営み、スルタンに非常な信頼を博して側近に自由に入出入りしていたという権葉という老人が大本営から藤原少佐の下へ派遣されてきた。藤原少佐は、大本営の指令どおり、権葉を南泰に派遣してケダ州スルタンとの連絡と、このスルタンを通じて他の州のスルタンや全マレー人に対する日本軍との親善協力を宣伝することとし、12月8日の開戦決定を知らせる大本営からの飛電が到着した12月4日に南泰に向けて出発させた。この際、藤原少佐は、スルタンを排撃しようとする「マレー青年連盟」とは微妙な関係を生じるかもしれないと予想したが、「マレー青年連盟」の幹部を説得して、全マレー人の大同団結と、華僑やインド人との協調、共栄に導かねばならないと考えた<sup>(注13)</sup>。

しかし、12月8日、開戦の日の早朝、イブラヒムはじめ「マレー青年連盟」の活動家約150名は、植民地政府の手で逮捕され、シンガポールの刑務所に投獄された。しかし、イブラヒムの片腕で逮

捕の手を脱れて潜伏したムスタファ・フセイン (Mustapha Hussein) や、いったん捕われたがイブラヒムの策略で脱出に成功しマレー半島を北上した「マレー青年連盟」副会長でイブラヒムの義弟のオナン・ピン・ハジ・シラジ (Onan bin Haji Siraj) は、開戦で南下して来た日本軍の藤原機関と12月中にペラ州で接触した<sup>(注14)</sup>。12月26日、オナンは藤原機関にたどり着くまでの経緯を説明した。それによると、「マレー青年連盟」のイブラヒム会長は、11月下旬にバンコックから藤原少佐が送ったメッセージを入手し日本軍との協力について全マラヤの同志に指令を与えた。そしてバンコックに使節を派遣して連絡すべくいろいろ研究中、早くも開戦を迎えたので実行できなかった。開戦の日、『ワルタ・マラヤ』社で会議中、英官憲のために一網打尽に逮捕されたために積極的な活動ができなかった。しかし、[ケランタン州の]コタ・バルー方面には多数のメンバーがいるから、さきの指令に基づいて日本軍に協力しているはずである、と述べた。事実、日本軍がマレー半島東北端のケランタン州に進撃したとき、たまたま州都コタ・バルーに居た「マレー青年連盟」のアブドゥル・カディール (Abdul Kadir) は、「マレー青年連盟」メンバーを探していた日本軍に連絡をつけ、日本軍にマレー人を敵性視しないよう要請した<sup>(注15)</sup>。このケランタン方面の戦闘で戦死した藤原機関の瀬川少尉の遺骨を届けてケランタン、トレンガヌの「マレー青年連盟」の2名のメンバーが12月14日にアロール・スターに到着した。以後、藤原機関は、マレー半島を南下して、ペラ州タイピンですでに日本軍宣伝部で働いていたムスタファ・フセインと解近したのである<sup>(注16)</sup>。

藤原機関は、日本軍の南進とともにイポー(ペラ州)に進出したが、1942年1月3日に「マレー青年

連盟」のオナン副会長が、タイピン、イポー地区から20数名の会員を糾合して「青年戦線」(Barisan Pemuda)を結成し、藤原機関本部に到着した。翌日、オナン・シラジは、「マレー青年連盟」の活動について藤原少佐に提議した。オナンの提議の第1は、シンガポールの監獄に収監されているイブラヒム会長以下の同志の救出に関する協力要請であった。提議の第2は、日本・マレー親善宣伝と、マラヤにおけるマレー人の民族運動に対する日本軍の支援要求であった。提議の第3は、「マレー青年連盟」会員の作戦協力に対する申し出であった。

オナン副会長の第1の提議に対し、藤原少佐は日本軍の協力を約した。しかし藤原少佐は同時に「マレー青年連盟」会員みずからもシンガポールに潜入して、好機に乗じて監獄から同志を救出するよう勧告した。提議の第2に対して、藤原少佐は、日本・マレー親善の宣伝には異存はないが、中国人や華僑を排撃するマレー民族主義運動や、スルタンはじめ現在のマレー人指導層を急激に排斥しようとする思想は、日本軍の東亜新秩序建設の理念や、マラヤにおける日本軍政の根本方針に背馳することを説明して異議を表明した。藤原少佐は、さらに、オナン副会長に対し、華僑やインド人に経済的実権を牛耳られている現状に対するマレー人の民族的感情には十分同情できるが、この現状に導いた責任の一半は明らかにマレー人の低い政治文化的水準や、怠惰な風習や、悪条件の体位などに帰せられるべきであり、もちろん統治者の政策がこれを助長した一原因ではあるが、虚心担懐にこの現実を観察するよう切望した。そして相協力してこのマレー人の欠陥を是正すべき一大青年文化運動(傍点——筆者)を展開することを提案した。藤原少佐は、この線に沿うマレー人の運

動に対しては、日本軍の保護と支援とを得られるように極力あつせんすることを約し、オナン副会長はこの意見に同意した。オナン副会長の提議の第3については、藤原少佐は、訓練のできていない僅少な要員をもって、直接作戦行動に協力を期待することは適当でないと考え、協議の結果、英軍後方のマレー人に対し、日本軍に対する親善協力の宣伝を実施することと、できれば英軍の監視の乏しい地区の軍用電話線の切断、遺棄兵器の収集などに協力することになった。

藤原少佐は、以上の協議の結果を第25軍参謀長鈴木少将と参謀副長馬奈木少将に報告してその認可を求めた。両少将は、マレー人の青年文化運動の趣旨には同意を示したが、排他的傾向に走らぬよう注意を喚起し、「マレー青年連盟」の具体的計画を見た上で考慮すると約束した。藤原少佐はこの上司の意向をオナン副会長に通知し、オナン副会長もこれを了承して研究を進めることを申し合わせた<sup>(注17)</sup>。

藤原少佐は、部下の米村少尉を「マレー青年連盟」との連絡主任に命じ、オナン副会長は、糾合した会員25名に対し、上記の申合せの趣旨に基づいて教育を開始した。3日間の速成教育ののちに、1グループ2名の宣伝班が5、6組編成された。これらの宣伝班は、まずクアラ・ルンプールやマラッカを中心とする地域のマレー人に対する宣伝任務が与えられ、英軍電話線の切断が副任務として付加された。これらの宣伝班は海岸方面すなわち日本軍近衛師団の正面から潜入させることになり、米村少尉がこの宣伝班を戦線に誘導して、日本軍と連絡のうえ潜入を指導した<sup>(注18)</sup>。

1942年2月15日、シンガポールのイギリス軍は日本軍に降服した。16日にオナン副会長ら「マレー青年連盟」同志により救出されたイブラヒム会

長は、2月18日に藤原少佐と藤原機関本部で会見した。藤原少佐は、「マレー青年連盟」の今後の本格的活動については改めて協議することとし、さしあたり『ワルタ・マラヤ』の再刊と「マレー青年連盟」同志の困窮者に対し、できるだけの援助を提供したい旨申し出た。イブラヒム会長との会見後、藤原少佐はただちに第25軍参謀副長馬奈木少将を訪ね、「マレー青年連盟」が今後政治結社（傍点……筆者）としての性格を脱し、文化団体としてマレー人の文化的向上を先導することについて了解と支援を求めた。

藤原少佐によれば、当時、軍は現住民の政治、文化、経済との諸団体を否認する頑迷短見な方針を採ろうとしていた。マラヤの戦勝に酔ったのか、あるいはいろいろの団体名義で抗日運動を行ってきた中国人の非協力に対する反作用なのか。藤原少佐にとって、そのいずれにしても大東亜諸民族の解放、新秩序の建設、共栄圏の確立等々八紘一宇の理想を掲げながら、このような無理解な軍政の方針をとる軍の真意は、全く諒解に苦しむところであった。藤原少佐からすれば、藤原機関は、詔書や声明に表われた理想に情熱を傾けて、インド人やマレー人やスマトラ人の共鳴を求めてきたのである。藤原少佐は、とうていこのような軍の不信に耐えがたく感じた。藤原少佐は、馬奈木少将にその所信を被瀝し、「マレー青年連盟」の正しい育成と保護とを強く要請した。その結果、馬奈木少将は、ついに、「マレー青年連盟」が文化団体としてマレー青年の文化啓蒙運動に当たることを承認した。馬奈木少将は、また、『ワルタ・マラヤ』紙の再刊と「マレー青年連盟」メンバーの就職優先について即座に同意した。藤原少佐はさらに、軍宣伝班長を訪問し、『ワルタ・マラヤ』紙の発行と資材、屋舎の無償提供を交渉して同意

を取りつけた<sup>(注19)</sup>。しかし、シンガポール占領後の第25軍による軍政機関が整備して、「マレー青年連盟」が平時的活動を展開することは、すでに軍政機関の域に入ったので、藤原少佐は、イブラヒムとオナンを馬奈木少将に紹介して、理解ある支持と指導を懇請した<sup>(注20)</sup>。

太平洋戦争勃発直前からマラヤに日本軍政機構が本格的に発足するまでの期間における「藤原機関」の「マレー青年連盟」に対する関係は、上に述べたような形で樹立され、展開した。日本側の藤原少佐の基本的方針は、すでに述べたように大本營で陸軍参謀総長から指令されたとおりであったが、もっと詳しく言うと、日本のマラヤ軍政に関する基本方針は、開戦直前の1941年3月陸軍参謀本部第1部研究班の手で「南方作戦における占領地統治要綱案」として作製された。この案は、1941年11月3日に南方軍総司令部が作製した「南方軍政実施要綱」および、1941年12月に大本營・政府連絡会議が採択した「南方占領地行政実施に関する件」の基礎となり、こうした大本營の基本方針によれば、スルタンは、マラヤの平定と治安の回復ならびに民衆の支持を得るために利用価値があることを認め、民心を安定し、現地人に日本の政策に協力させるように仕向けるのにスルトンの回教上の地位と回教に基づく現地の習慣は尊重しなければならないという立場をとっていた。さらに、開戦後1942年3月に参謀本部で作られた「占領地軍政実施に関する基礎要領」も上記の立場を再確認したのである。参謀本部は、この3月の文書ではじめて、フィリピンと蘭領東インドとマラヤは日本の永久的領土としてとどめることを端的に述べている<sup>(注21)</sup>。開戦直前に田村大佐が担任し藤原少佐がその衝に当たっていた「マラヤ工作」は、1941年12月4日に南方総軍司令官寺内大將

の手に移った。寺内大将は、この仕事をマラヤ方面の作戦を担当する第25軍司令官山下奉文中将にその区署を命じ、藤原少佐は南方総軍司令部参謀に、藤原機関のメンバーはそれぞれ南方軍総司令部の一員に転補された。南方軍総司令官は、藤原少佐と彼の部下を第25軍司令官のもとに派遣し、マラヤの工作について山下中将に藤原機関を区署する権限を与えた。このような指揮系統の下に前記の中央の基本方針に沿って藤原少佐は活動したわけである。

それでは、「マレー青年連盟」の指導部は、開戦からシンガポール占領前後までの間に日本軍と関係をもつことについて、どのような考えを抱いていたのであろうか。

「マレー青年連盟」副会長オナン・シラジヤムスタファ・フセインがイポーで「青年戦線」を設立し、日本軍に作戦協力を申し出たことはすでに触れたが、その動機となったのは次の三つの点であった。(1)イギリスが各州のスルタンに強制して日本に宣戦布告させれば、マレー人が日本軍に敵性視されることになるから、「マレー青年連盟」はこの危険からスルタンとマレー民衆を救わねばならない。(2)イギリスの手でシンガポールの獄につながれている「マレー青年連盟」メンバーを救わねばならない。(3)「インド独立連盟」その他の非マレー人の活動のバランスをとることが全般的治安のために必要である。

こうした動機から形成された「青年戦線」は、ただちにペラ州のスルタンを探し出して宮殿へ連れ戻したのを始まりに、方々に逃げ回っていたセラゴール州とパハン州のスルタンをも探し出す手を打った<sup>(注22)</sup>。オナンはまた、日本軍側に次のように要請した。(1)たとえ各州スルタンが対日宣戦布告を行なう場合でも、これはイギリスの強制

によるものであるから、マレー人を敵性視しないこと。(2)マレー人婦女子の貞操を守ること。そうしなければ、マレー人は頭に来て暴動を起こす。(3)マレー人の財産を犯さないこと。(4)日本軍に捕えられたマレー人は「マレー青年連盟」の「青年戦線」に引き渡し、その手で調査、保護を行なうこと<sup>(注23)</sup>。この要請は日本側によって受け入れられたので、「青年戦線」は日本軍の進撃と行動を共にして活動し、マレー人の警官、官吏、兵士、イギリスの間諜を勤めていたマレー人で日本軍から「マレー青年連盟」に引き渡された者も保護した。こうして、多くのマレー人が特に保身のため「マレー青年連盟」に入会したが、その中にはマレー伝統的支配層に属する者も少なくなかった。しかし、ペラ州タイピンからジョホール・バルーまでの各地で、マレー伝統的支配層に属する人々が、「青年戦線」の活動を阻害しようと策謀した<sup>(注24)</sup>。青年戦線は、日本軍の戦勝に影響されてか意気が大いに上がり、ついに日本軍の植民地主義的本質を忘れて、ムスタファ・フセインらの「青年戦線」メンバーは、クアラ・ルンプールで日本軍に対し「マラヤ共和国」の樹立を提案した<sup>(注25)</sup>。

シンガポール陥落後、監獄から出て「マレー青年連盟」の指導権を再び握ったイブラヒムは、1942年2月17日の夜に同志を集めて、次のように述べた。「諸君、現在の日本の勝利はわれわれの勝利ではない。われわれの闘争はこれからだし、日本側の態度がどんなものかまだ判っていないが、日本は植民地主義者以外の何者でもないのだ。……マレー人インテリゲンチヤの数はすこぶる限られているから、われわれは、これらインテリをすべて助け、われわれと協働させるようにする必要がある。それが目下の基本方針である」<sup>(注26)</sup>。

こうして、「マレー青年連盟」は、次のような

活動を行なった。(1)シンガポールで日本軍に捕えられていたマレー人の元志願兵や「マレー連隊」の隊員を助け、釈放した。(2)日本軍の憲兵隊に追われている数人のマレー人の将校や警官をかくまった。その中でノール・モハメッド・ハシムほかのマレー人官吏は、「マレー青年連盟」の手で2カ月間保護された。(3)日本側の態度いかにをにらみながら「マレー青年連盟」の運動を再組織し、マレー民族主義運動を強化した。(4)日本に抵抗するための地下工作を復活し、「マラヤ人民抗日軍」略称MPAJAマレー人部と連携した<sup>(注27)</sup>。

しかし、イブラヒムは、日本軍と共に南下してきたオナンらの同志から、「青年戦線」が日本軍と協働し、「インド独立連盟」と連携したこと、特に「ハリマオ」の活動と「マレー青年連盟」とが結びつけられたこと等々、指導者としてのイブラヒムが全然知らなかった事実を聞かされて、驚き、かつ危惧の念をおぼえた。イブラヒムによると、「マレー青年連盟」の指導部は、それまで「ハリマオ」こと谷豊の名を聞いたこともなかったし、「ハリマオ」が行なってきたようなスパイ活動を助けたり、スパイ活動を行なうよう「マレー青年連盟」会員にも他の誰にも指示したことはなかった。イブラヒム自身が行なった情報・調査活動は、「マレー青年連盟」の政策を決め、日本に対する党の態度を決定するため全般的な情勢を知るために行なったのであり、その党の態度というのは、日本に対しマレー人は敵対しないという以上には出なかった(傍点——筆者)、という<sup>(注28)</sup>。

シンガポール陥落の数日後、谷豊はジョホール・バルの野戦病院でマラリアのため病死し、「ハリマオ」とともに活動していたマレー人は、藤原機関から「マレー青年連盟」会員とみなされて、「マレー青年連盟」指導部の手に移された。

そして藤原機関がみずから音頭をとって、「マレー青年連盟」との会合を催し、昭南島日本軍宣伝部関係者と「インド独立連盟」代表も招待したその席上で、藤原少佐は「マレー青年連盟」の青年を賞讃する演説を行ない、この演説は翌日シンガポールの新聞に報道された。イブラヒムの見るところでは、これは日本側が意識的に打った手であって、その隠された目的は、(1)藤原少佐が自分の機関の活動を宣伝するとともに、谷の活動のメリットを「マレー青年連盟」に転化し、それによって藤原機関が管掌している「インド独立連盟」とのバランスをとる。(2)「マレー青年連盟」の名を大きく出すことによって、以前に日本がタイなどと結んでいた約束に基づくタイなどの要求を拒否ないし値切る。(3)当時計画中の日本軍のジャワなどインドネシア進攻作戦に、ちょうどインド進攻作戦のためにインド人に対して行なったように、「マレー青年連盟」の「青年戦線」を持ち上げて、この作戦の一端に使う<sup>(注29)</sup>。

「マレー青年連盟」指導部は、こうした日本側の動きを注視していたが、1942年2月末に藤原少佐は、「マレー青年連盟」の若干の指導者をシンガポールの日本軍当局に引き合わせた。この会見の席上で、イブラヒムは、「マレー青年連盟」の会長として次の二つの要請以外に何の提案も出さなかった。その提案とは、(1)「マレー青年連盟」が平常の活動ができるようにすること、(2)イブラヒムらがすでに再刊した『ワルタ・マラヤ』紙がマレー人の「マレー青年連盟」の所有するものと決めること。この二つの要請に対し、ただちに受け入れる用意があるという意向が表明されたが、その後実現しなかった。「マレー青年連盟」の指導部は、日本の植民主義者の態度を思い知らされ、時を移さず次のような手を打った。(1)インド

ネシアの共産主義者で1930年代にマレー半島で活動し、「マレー青年連盟」とマラヤ共産党の間を仲介していたスータン・ジュナインのような地下工作指導者をクアラ・ルンプールその他の地方に派遣する。(2)「マレー青年連盟」の指導者を各地に送り、迅速に組織づくりに当たらせる。(3)マレー人を分断しようとするいっさいの試みを克服するため、シンガポールで勢力を結集する<sup>(注30)</sup>。

日本のシンガポール攻略当時から、日本軍以外でシンガポールの治安の回復に重要な役割を演じたのは、「マレー青年連盟」と「インド独立連盟」の二つの組織だけで、「マレー青年連盟」はもっぱらマレー人とアラブ人の世話を当たった。この関係から、シンガポールのマレー人で「マレー青年連盟」に加入する者が続出し、各地に支部が雨後のたけのこのように結成され、リャオ群島にまで及んだ。その結果、会員は1万人を下らない勢力となったが、「マレー青年連盟」のイデオロギーが何であり、マレー民族主義闘争の今後の方向いかにという問題について理解のある者はごく少なかった<sup>(注31)</sup>。

1942年3月半ばまでに蘭領東インドは日本軍の手に落ち、したがって「マレー青年連盟」も日本側にとって重要でなくなった。「マレー青年連盟」の指導部は、そうは言われなかったが、「マレー青年連盟」は日本側に一時的な手段として使われたのだということをすでに十分悟っていた。そこでイブラヒムは、早い機会をとらえて、1942年4月初めから5月末までマレー半島両海岸を順遊した。この順遊の目的は、古くからの会員だけを残し、日本占領期に入ってから入会した多くの新会員を切って、再び今度は抗日の地下工作に、「マレー青年連盟」を戻すことであった<sup>(注32)</sup>。(つづく)

(注1) 筆者のイブラヒムとの面接、1973年2月、

ジャカルタ。

(注2) 飼手馨四氏との面接、1974年8月、東京。

(注3) イブラヒムとの面接、1973年2月、ジャカルタ。

(注4) イブラヒムとの面接、1973年2月、ジャカルタ。飼手氏との面接、1974年8月、東京。

(注5) Ibrahim bin Haji Yaacob, *Sedjarah dan Perdjungan di Malaya*, Jogja, 1951年, p. 86.

(注6) 藤原岩市『F機関』原書房 1966年 26—27ページ。

(注7) Ibrahim, *op. cit.*, p. 87.

(注8) 藤原 前掲書 36—37ページ。

(注9) 同上書 42—50ページ。

(注10) 同上書 71ページ。

(注11) 同上書 71ページ。

(注12) 同上書 84ページ。

飼手氏との面接、1974年8月、東京。

(注13) 藤原 前掲書 84—85ページ。

(注14) Ibrahim, *op. cit.*, p. 91. 藤原 前掲書 147ページ。

(注15) Ibrahim, *op. cit.*, p. 92.

(注16) *Ibid.*, p. 92.

(注17) 藤原 前掲書 169ページ。

(注18) 同上書 168—170ページ。

(注19) 同上書 266—267ページ。

(注20) 同上書 267ページ。

(注21) Akashi, Yoji, “Japanese Military Administration in Malaya,” *Asian Studies*, Vol. VII, No. 1 (April 1969), pp. 82—83.

(注22) Ibrahim, *op. cit.*, p. 93.

藤原岩市氏との面接(1974年7月、東京)によれば、最終的に採り出したのは藤原機関だったという。

(注23) Ibrahim, *op. cit.*, p. 93.

(注24) *Ibid.*, pp. 94—95.

(注25) *Ibid.*, p. 95.

(注26) *Ibid.*, p. 95.

(注27) *Ibid.*, p. 95.

(注28) *Ibid.*, pp. 97—98.

(注29) *Ibid.*, pp. 97—98.

(注30) *Ibid.*, p. 99.

(注31) *Ibid.*, pp. 99—100.

(注32) *Ibid.*, p. 100.

(調査研究部主任調査研究員)